

表題	イチゴの夜冷短日処理と本ば基肥量	機関	農業研究センター 農産園芸研究所
<p><b>概要：</b> 夜冷短日処理したイチゴは、本ばの窒素基肥量が多いほど葉の展開が早くなり、少ない場合には第1次腋花房の花芽形成は早まるものの分化率が高くなるまでに期間を要する。9月上旬に定植する場合は、窒素基肥量 20kg/10a では花芽分化がバラつくため、10kg/10a 程度が適している。</p>			

## 研究のねらい

促成イチゴは、夏期低温処理技術（夜冷短日処理や低温暗黒処理）の導入により収穫期が前進化し11月上旬からの出荷が可能となった。

しかし、暖秋の年には第1次腋花房（いわゆる2番花）の花芽分化が不安定になり2番花の出蕾、開花が遅れたり不揃いになったりする。

また、生産上からは1月から2月にかけて収穫量が少なくなる中休み現象が発生し大きな問題となる。

そこで、基肥量が第1次腋花房の花芽形成や収量に及ぼす影響について検討し、生産安定のための適正な施肥量を明らかにする。

## 研究の成果

1. 基肥量は、新葉の展開に関係し多いほど葉の展開が早くなる。
2. 基肥量が少ない方が、第1次腋花房の花芽分化が早く始まるが、その後は生育が緩慢なため分化率や分化の程度が高くなるのに期間が長くなる。
3. 10aあたりチッソ基肥量 20kg は、花芽分化のバラツキが大きくなる。
4. 9月上旬に定植する場合のチッソ基肥量は、第1次腋花房の花芽分化の安定性と出蕾、開花の早さや収量性から 10aあたり 10kg 程度が適していると考えられる。

## 普及上の留意点

1. 第1次腋花房の花芽分化期は、マルチングや天井ビニールの被覆期にあたり、花芽分化に対する温度の影響をできるだけ少なくするため、マルチングや天井ビニールの被覆時期をできるだけ遅くし、ビニール被覆後はハウス内が高温にならないように換気に努める。

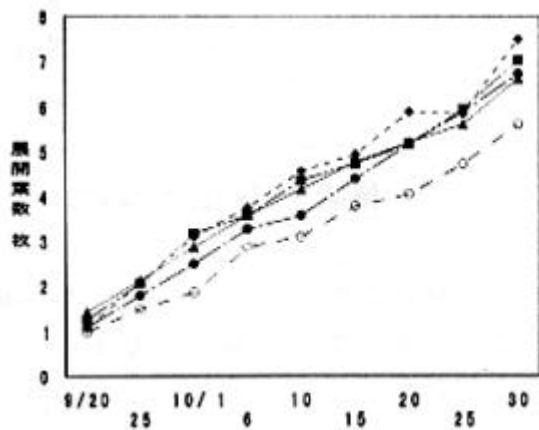


図1 展開葉数の推移

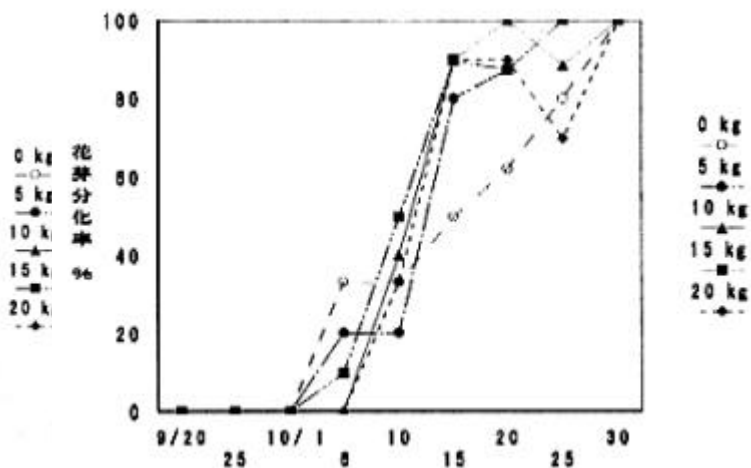


図2 第一次腋花房花芽分化率の推移

図3 第1表 頂花房及び第1次腋花房の出蕾、開花、収穫始め日  
第1表 頂花房及び第1次腋花房の出蕾、開花、収穫始め日

施肥量 (kg/10a)	頂花房			第一次腋花房	
	出蕾日 (月/日)	開花日 (月/日)	収穫初め (月/日)	出蕾日 (月/日)	開花日 (月/日)
0	10/15.9	10/25.1	11/23.4	11/27.9	12/13.2
5	10/13.7	10/22.4	11/20.0	11/27.4	12/11.0
10	10/14.9	10/23.3	11/21.9	11/24.4	12/ 7.9
15	10/14.0	10/23.1	11/20.2	11/26.3	12/11.1
20	10/14.1	10/23.2	11/20.5	11/23.9	12/ 8.6

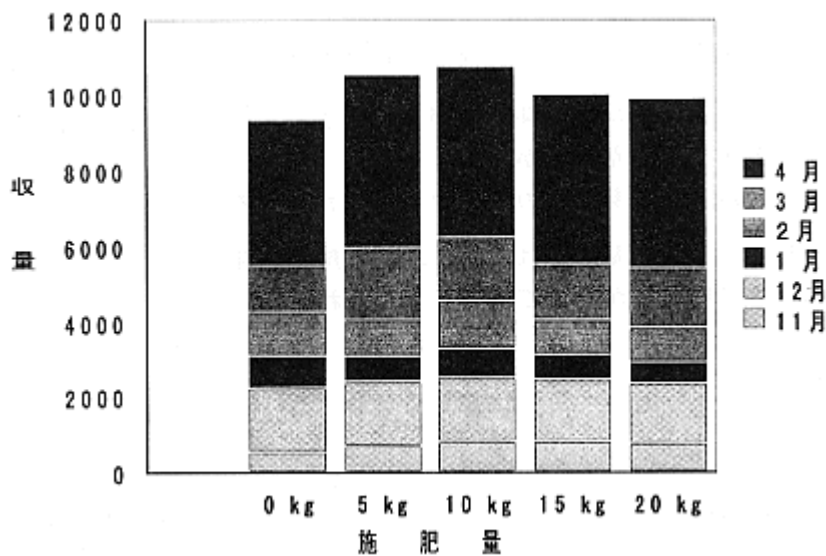


図3 商品果月別収量現地試験